報告要旨

世界資本主義はいずこへ

― 金融の自由化と不安定性を中心に ―

平井俊顕（上智大学）

この 30 年間の世界経済の動向に最も大きな影響と方向性を与えてきたのは「市場にすべてを任せる」という「ネオ・リベラリズム」（サッチャリズムやレーガノミクス）であった。政府による経済への介入は効率性を阻害し発展を妨げる、規制は可能なかぎり撤廃するように構造を改革すべし、という思想である。「ネオ・リベラリズム」の信条に基づいて、金融、労働、資本の分野での自由化が、文字通りグローバルなスケールで進められてきた。

そのなかで最も重要なのが金融の自由化である。本報告では、それがどのように進められ、それがどのように世界経済を不安定なものにしてきたのかを、そしてその結果生じたメルトダウンを経験した政府がどのような対策を講じてきたのかを、主としてアメリカを対象に検討・評価することを目的としている。

最初に、この 30 年間にアメリカの金融自由化がいかにして実現されていったのかをみる（第 2 節）。次に、世界金融システムが金融の自由化によっていかに不安定なものになっていったのかを、「シャドウ・バンキング・システム」(SBS) の肥大化、および近年実際に生じた 2 つの事例でみることにする (第 3 節)。

続いて、金融自由化がどのような影響を世界におよぼすことになったのかを、３つの側面からとらえたうえで（第 4 節）、金融規制改革がなぜ必要なのかを論じていく (第 5 節)。その必要性にういて一般的に述べたうえで、近年いくどとなく襲ってきた金融危機は「自由」概念と「市場」概念に再考を迫っているという点に注意を喚起する。最後に、アメリカで、こうした金融システムの自由化がもたらした不安定性を除去する努力が結実したものとしての「ドッド=フランク法」(2010 年 7 月) に焦点を合わせる（第 6 節）。これは SBS を根絶し、金融活動を政府の監督下におくことで、健全な市場経済を復活させる法的枠組みを構築しようとするものである。最初にその基本的な枠組みをみたうえで、その実施が現在に至るまで非常な困難に遭遇してきている状況をみることにする。

わたし達は金融を抜きにして資本主義システムの存続を考えることはできない。しかし、だからといって金融を自由放任の状態のままにおくならば、より深刻な経済破綻が今後も生じる恐れがある。金融システムを適切にコントロー

ルしながら、「正しい資本主義」を維持・発展させていくことができなければ、資本主義の将来はきわめて危ういものとなるであろう。